

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2014 年 2 月 1 日 発行
(通巻 460 号)

現代座レポート No. 57

- ・ 2014 年、自立・協同・歴史を見直す。 (1)
- ・ 「約束の水」 稽古風景。現代座サポーターズ結成。 (2)
- ・ 「山中三郎の人生に学ぶ」 今村純二 (3)
- ・ 「遠い空の下の故郷」 ハンセン病療養所に生きて (4)
- ・ NPO 現代座を支える人々 第十五回 今井敬一郎さん (5)
- ・ 「多文化共生と日本文化」 木村快 (寄稿原稿) (6) ~ (7)
- ・ お知らせ/新規・継続会員・寄付者のお名前 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

二〇一四年 自立・協同・歴史を見直したい

◆ 『蒼い空・友の呼ぶ声』
(木村快・作)
今年取り組みたい三作品はいずれも「地域コミュニティとは何か」「自然と共生」「戦争体験者の声を聞く」「協同による災害復興」をテーマにしています。

◆ 『約束の水』(木村快・作)
祖母の生まれ育った村を訪ねる日系ブラジル人女性と、見捨てられた無人の村で人生の最後を迎えようとする老人の出会いが、新しい人間の共感を広げていきます。二月、現代座会館で上演。

◆ 『武蔵野の歌が聞こえる』
小金井シニア SOHO と NPO 現代座による街おこし文化活動、「川崎平右衛門プロジェクト」も四年目を迎えました。「わたしたちの街は農民の協同によって生まれた」という内容の『武蔵野の歌が聞こえる』の基礎稿(ストーリー)が完成しました。

◆ 『蒼い空・友の呼ぶ声』
(木村快・作)
江戸中期、宝永大地震・富士山噴火によって日本列島は食糧・財政の危機に直面します。幕府は災害復興の目玉として現在の東京都西部から埼玉県南部に至る広大な荒地地、武蔵野台地に新田開発を試みます。
しかし、幕府官僚の過酷な管理で農民は窮地に追い込まれます。そのとき、農民出身の指導者川崎平右衛門が農民の協同を組織し、八ヶヶ村を自立した村として完成させます。現代の災害復興を考える話として、用途に応じて、語り、群読、合唱構成劇を制作します。



『約束の水』 2 月上演。



『蒼い空・友の呼ぶ声』 秋に上演予定。



史実の再検討をすすめる川崎平右衛門プロジェクト研究会。

「約束の水」稽古進む

現代座ホールでは二月公演の「約束の水」の稽古が進んでいます。

「約束の水」は二〇〇四年十月から二〇〇九年五月まで、東京、神奈川、埼玉、長野、岐阜、京都、北海道などの各地で五九回の公演を積み重ねています。そして多くの方々から、「たとえ歳をとっても、自分に出ることを精一杯やって最後まで自分らしく生きたい」と願う主人公三郎老人の姿に強い共感が寄せられました。

東日本大震災を経た現在、私たちの社会は今なお原発を推進しようとする一方で耕作放棄地を増大させ、森林崩壊による水資源の枯渇を招いています。自然と共にありたいという高齢者の生き方を描いたこの作品は、まさに現代のテーマだと思っています。

この作品はまだ終わりにしたくないということで、セットも小道具も大切に保存してきました。昨年十二月の終わりに地域の方にも手伝っていただいて、セットをホールに運び入れました。山の中の古い家がよみがえりました。

今回は半数以上の出演者が新しくなります。一月からはいよいよ本格的な稽古が始まりました。

作・演出の木村快も「自分が十年歳をとると、以前には見えていなかったものが見えてくる」と、出演者の個性に合わせて台本を書き直しています。出演者も新しい発見をしながら、稽古を積み重ね、新しい「約束の水」の世界が創られています。以前の公演を見てくださった方も、ぜひ、新しい「約束の水」においでください。

(木下美智子)



舞台装置の運び込み



舞台装置の点検を終わって



稽古風景

上演日程

2014年
2月

13日(木)	14日(金)	15日(土)	16日(日)	17日(月)
-	14:00	14:00	14:00	14:00
19:00	19:00	-	-	-

一般 3000円

小中高 1000円

現代座ホール

各回 80名の予約制です。TEL:042-381-5165 FAX:042-381-6987 メール:michiko@gendaiza.org

「現代座サポーターズ」結成される

「約束の水」公演に向けて、チラシを配ったり、お客さんを集めたり、受付や喫茶を手伝ったり、それぞれ出来ることで現代座を応援し、公演を成功させよう、というグループができました。十一月二十七日に最初の集まりを持ち、ついた名前は「現代座サポーターズ」です。この日は九人が参加しました。

いつも受付を手伝ってくださっている方や、見に来てくださっている方だけでなく、前回の「出会の街」ではじめて現代座を見た方や、最近現代座を知った方も来てくださいました。はじめて顔をあわす人も多いのですが、みんなで考えると色々なアイデアも出てきます。

一月一六日の集まりでは、新しいサポーターも三人増えて、「約束の水」の主人公三郎老人を演じる今村純二を囲んで語り合いました。

ただ現代座を応援する会というだけでなく、色々な活動をしている人が出会い、知り合い、新しい輪が広がっていくような場になれるといいな、と思っています。

(木下美智子)



山中三郎の人生に学ぶ

今村純一



いまむら・じゅんじ
長野県松本市在住。
一九六五年、統一劇場の創立に参加。一九九七年、劇団現代座解散と同時に松本市に移住。現在はNPO現代座副理事長。NPO現代座では松本市から通いながら「もくれんのうた」「蒼い空・友の呼ぶ声」に出演。「約束の水」では山中三郎役で出演。

私は東京生まれなので「ふるさと」はここ松本ではなく、強いて「ふるさと」と言えば、終戦間際に本家を頼って疎開し、小学校時代を過ごした甲州勝沼なのです。十五年前、結局山に囲まれた松本への移住を選んできましたのは、祖先の血がそうさせたのかも知れませんが。毎朝玄関先に出ては白く連なる山々に挨拶をするのが日課になり、「ふるさとの山に向かひて言うことなし、ふるさとの山はありがたきかな」と、つい啄木の心境を気取りたくなるような恵まれた環境で日々を暮らしています。「今日は放射冷却の影響で、よく晴れてはいるが寒気が厳しい」、そんな日は、雪が朝日に映えて明け方の山々はピンクに染まります。アルプスがことのほか美しく見える朝です。そんな暮らしのなかで七十五歳を迎える私は、今年「約束の水」で新しい挑戦をさせていただくことになりました。

昨年までの「友の呼ぶ声」の主人公太田は、八十二歳（ものがたり上の年齢）の特攻隊を体験している老人でした。今回の「約束の水」の山中三郎も満蒙開拓

の体験を持つ、八十五歳の老人という、どちらも激動の昭和を生き抜いた世代です。気がつけば、昭和の時代を証言出来るこの世代が間もなく消えていくという現実があり、これは恐ろしいことに思えます。いつの間にか歴史が途絶えて、あのような時代が間違つて再来するかも知れないという怖れです。

山中三郎を演じるということは、この最後の世代の代弁をするということであつて、次の世代に語り継いでいく役目があるということなのでしょう。

山中三郎は昭和十七年に満蒙開拓青少年義勇軍として当時の満州へ渡っています。

そこで私は、何か啓示を得たいものと、過日、長野県下伊那の阿智村に、「満蒙開拓平和記念館」を訪れました。実は、国を挙げて強行されたこの満蒙開拓の国策には長野県が全国で最も多くの人々を送り出して協力しているのです。

長野県では、送り出してしまった痛みにもしつつかり向き合つて、その歴史を後世に伝えていこうと、昨年四月に日中友好協会など民間の人々の手で「満蒙開拓平和記念館」が開設されました。四月から年末までの八ヶ月間で全国から二万五千人の人々が訪れたそうです。

記念館には、数多くの悲劇の記録がありました。とても涙なくしては語れない事実を知ると、運良く帰国が叶った人々も、永年人には言えない苦しみを心に抱えて生きて来られたことがわかります。教師として子どもたちを送り出した方の証言の中にあつた言葉です。「村長にはほめられたが、俺はうれしかなかったよ。十五歳の者をそんな満州に送り込むなんて、無茶じゃねえか。今の中学二年生だよ」

さらに、こんなことまで私は知ってしまった。国は、降伏の直前八月十四日には「居留民は定着させる方針を執る」という政策を出しており、降伏後の八月二十六日には「土着する者は、国籍を離るるも支障な

きものとする」と言っています。これは、はっきりした棄民政策ではないでしょうか。どうかお願いだからこの上この方たちに「それは自己責任だ」なんて言葉をあびせないで欲しい。

帰国した山中三郎のような人たちは、郷里に帰つても、荒地を開拓し、一からの出直しの暮らしが待っていました。そして、さんざん振り回されて昭和を生きた人々を、時代は今また大きな流れから切り捨てようとしています。経済性のない過疎の村はつぶしてしまえというのです。

でも、三年前の3・11の大きな出来事以来、私たちは彼らから学ぶことが沢山あることに、本当は気がついているのではないのでしょうか。もつともつと自然のなかで学びながら生きること。そこに人間は喜びを持って生きていけるのではないかと。

「我らはそこに還るべきではないか」。
三郎はそう言っている気がするのです。



長野県下伊那郡阿智村 満蒙開拓平和記念館で

「遠い空の下の故郷」

〜ハンセン病療養所に生きて〜

ハンセン病療養所で暮らす女性の人生を語る、この活動を十一月末から十二月はじめにかけて二ヶ所で行うことができました。

今回は木下美智子の語りと松本真理子のアコーディオンの生演奏という新しい試みでした。

十一月二十六日(火) 浄土宗東京教区
第十四回 「人権の世紀」人権を考える研修会



浄土宗東京教区の人権同和推進委員会の研修会に呼んでいただきました。委員長の長谷川岱潤さんはずっと人権問題に取り組んでいらつしやる方で、曹洞宗の人権擁護推進主事の佐藤大英さんのご紹介で知り合うことが出来ました。そして早速、年に一度の人権の研修会に呼んでくださったのです。

会場の増上寺は東京タワーのすぐそばにある大きなお寺です。その地下にある三縁ホールに都内の浄土宗のお寺のご住職やご家族百人以上が集まりました。男性がほとんどだったのですが、最初に「ふるさと」を歌うところから、

大きな声でいつしよに歌ってくださって、最後まで集中して聞いてくださいました。帰る時「良かったよ」と声をかけてくださる方や、ご寄付をくださった方も多く、ホールを出て見上げたライトアップされた東京タワーの美しさとともに、心に残る一日でした。

十二月七日(土) 狛江市
人権週間に学ぶ「話・カフェ」第四回
ハンセン病患者の声に耳を傾けて
〜木下美智子朗読の会

狛江市では一昨年の七月にも市原広子市議会議員の「話・カフェ」の集いで呼んでいただきました。そして今回は人権週間にあわせて企画していただきました。

会場の「カレーショップ・メイ」はNPO狛江さつき会が、障がいを持つている人の就労支援でやっているお店です。白い壁の明るい店内では手作りの木工作品の展示などもやっていて、あたたかい心遣いが伝わってきます。

小さなお店ですからテーブルと椅子の向きを、見やすいように少し変えて、すぐ目の前でお話しました。参加して下さったのは市原さんが是非聞いて貰いたいと呼びかけた地域の学校の先生やご婦人達三十人ほどです。パウンドケーキとコーヒをいただきながらのアットホームな雰囲気、私も素直な気持ちで語る事ができました。アコーディオンの演奏がとても良かったと言っていたので、もううれしいことでした。

(木下美智子)



十一月〜一月 活動日誌

毎月やっている活動

川崎平右衛門プロジェクト・例会
劇場講座・例会
SPレコード雑談会・最終日曜日

白黒シネマの会・例会
「緑町ふれあいサロン」第三木曜日開催

十一月四日 「現代座レポート56号」 発送作業

二一、二三日 「約束の水」稽古

二六日 「遠い空の下の故郷」 浄土宗人権研修会

二七日 「現代座ポーターズ」 結成

十二月 七日 「遠い空の下の故郷」 狛江市

九〜二日 ホールの平台作り

一八〜二〇日 「約束の水」稽古

二〇日 NPO現代座理事會

二九日 「約束の水」セット搬入・大掃除・忘年会

一月 九日 「約束の水」稽古

一四日 川崎平右衛門・音楽打ち合わせ

現代座ホール

十一月 一日〜四日 劇団「僕らの週末」公演

二十四日 劇団「シアター青芸」稽古

三階小ホール

十一月二十、二一日 劇団「影法師」稽古

十一月二十八日〜十二月一日 劇団「花時計」公演

十二月十八日・一月十五日 飯村先生うたの講座

一月二〇日 小金井女声合唱団 練習

定期使用 二階サロン

毎日曜日 早稲田ラジオスクール(学生支援)

毎月曜日 子どもクラブ・パンピーン

毎水曜日 熟年パソコンサークル

隔木曜日 ipad 熟年講座

NPO現代座を支える人々

第十四回 今井啓一郎さん

記 武本英之



今井啓一郎さん
(いまいけいいちろう)

頼もしい人が現代座の仲間に加わった。人を包むオーラにはいろんな種類があるようだ、今井さんのオーラは掛け値なしの「元氣印」。

明るく、パワフルで、エネルギーッシュ——初めて今井さんと話す人は、きっと誰もがそんな印象を持つにちがいない。「今井さんとお話していると、何でもやれそうな気になってくるから、不思議なのよねえ」と現代座の木下美智子さんも同じ感想を抱いておられる。

今年二月で四八歳になる今井さん。名刺には、公益法人小金井市商工会理事、同商工会の個店活性化委員長、小金井市の十八の商店会が加盟する小金井市商店会連合会会長、東小金井南口商店会会長といった肩書きが並ぶ。いわば、地元小金井経済界の若きホープである。経営する会社は工務店と不動産業の二社。三〇歳の頃、独立起業して今に至る。

そんな今井さんと現代座との出会いは何だったのだろうか。話は一年半前の強風災害に遡る。現代座が入る現代座会館は、前身の統一劇場時代から数えると築四〇年以上も経つ。当然老朽化している。座長の木村快さんとスタッフの人達がトンカチ片手に雨漏りなどその都度防いできたが、関東地区を襲ったあの嵐の晩、ついに会館の東側の外壁が一部脱落、悪いことに落下した瓦礫が隣家の庭先を侵

してしまった。この直面する非常事態、当時、何人かの方々が「救世主」として登場されるが、今井さんもその中の一人だったのだ。今井さんは早速、足場を組んで、これ以上壁が壊れても周囲に迷惑がかららないよう、会館全体をネットで覆った。それから、壊れた箇所をみんなの協力で少しずつ修繕していった。お金もかかったが、「払える範囲で少しずつ払ってくださればいい。今の現代座の財政状況では腰を据えて何年かかけてやるしかないでしょう」と、今井さんの温情ある言葉に応えるように現代座会館は何とか復旧した。現代座にとって今井さんは恩人である。この時、今井さんを現代座に紹介したのは現代座で顧問税理士を務める馬場利明さん。馬場さんが参加するNPOに今井さんが所属していた縁による。世の中、いろんな人と人の輪でつながっていくものですね。

こうして今井さんは現代座と関わったが、今井さんによると「子供の頃から劇団があるのは知っていましたが、劇団という敷居が高くて、近寄るのも遠慮していました。自分のように知っていてこれだから、存在すら知らない人は一杯いるんじゃないかな」とのご指摘。芝居と縁のなかった今井さんだが、現代座を知ってからは、「蒼い空・友の呼ぶ声」「出会いの街」「遠い空の下故郷」ハンセン病療養所に生きて」など、現代座の芝居や朗読劇を観るようになった。「シーンとききました」と今井さん。「テレビや映画は場面がどんどん変わるから頭を使わないで見えますが、お芝居は場面転換も少なく、想像力をたくましくさせられますね」とも。

昨年十一月、現代座を地域の出会いの場にしようと、現代座の支援者が十五人近く集まり「現代座サポーターズ」が結成された。今井さんもその有力メンバーである。「小金井に劇場があるなんて、翻って考えると、街の宝です。現代座には地下にあんなに立派な大舞台もあるし。いろんな人がここに集まるといいですね」と今井さん。

今井さんと話しているとワクワク感が生じて元氣が出

てくるが、それもそのはず、名刺の肩書きが物語るように、地元商店街の活性化を通じて数々の実績を積んでこられた。五年前、小金井市制五〇周年記念イベントの一環で行った野川公園でのキャンデルナイトが白眉だろう。野川沿いにキャンデルを一万コーナー敷設、野川の魅惑の夕べを演出した。延べ二万五千人がこのイベントに訪れたらしい。この時、市から三百万円、協賛金四百万円、東京都から三百万円の援助を獲得、一千万規模のイベントを責任者として成し遂げている。毎年秋には商工会主催の名物市を実行委員長として実施しておられる。3・11東日本大震災の際はプロジェクトを逸早く立ち上げ、被災地支援にも乗り出したそうだ。

目を見張る活躍だが、「結果が出せたのは仲間がいたから」と今井さんは振り返る。「いつも、こういうことをやりたい、と思つて実行してきましたが、何かやろうとする」と敵も増える一方で、濃い仲間も増えるんです。そんな濃い仲間と出会うためぐり合い、フォローしてくれたから実現できたのだと思います」と、何かやる時の仲間の大切さを訴える。

仲間たちと酒でも酌み交しながら、小金井市の新しい街づくりをどう推進するか、日夜、意見を交わす姿が浮かんでくるようだ。是非とも、その議論の延長線上に、地域の仲間の出会いの場として現代座をどう活性化させるか、位置づけていただきたいものである。「とにかく一回、現代座に来ていただくことが大事です。起爆剤はなかなかないですが、一回来ていただき、少しでも興味を示してくれる人を大事にしていく。話はそこからですかね」と今井さん。現代座サポーターズの仲間の輪が広がっていく予感がしてきたのは小生だけではなからう。(了)

※このシリーズを担当している筆者の武本英之さんは専門誌「東京交通新聞」の編集長。NPO現代座正会員でもあります。

日本ブラジル中央協会『ブラジル特報』寄稿文

多文化共生と日本文化

木村 快

この文章は日本ブラジル中央協会発行『ブラジル特報』の依頼で二〇一三年一月号の巻頭言として寄稿したものです。

ブラジル関係者を対象とした文章であるため、一般の読者に対してはちょっと説明不足の点がありますが、NPO現代座の事業報告の一つとして、原文通り掲載します。

◆日系ブラジル人

移民七〇周年の一九七八年、三ヶ月ばかりのブラジル取材のついでに、母のいとこ三家族の消息を尋ねた。わたしの父母は昭和の初めに当時日本の植民地であった朝鮮で結婚し、わたしは朝鮮で生まれた。だからブラジル流に言えば移民二世である。一方、母の叔父一家はブラジルのバストスに移住し、息子たち三人はサンパウロ州各地で生活を営んでいた。

わたしのために九家族が集まって歓迎のパーティーを開いてくれたが、母の従兄弟たちは幼少期に移住したのと、戦後はほとんど日系社会との接触がないので日本語は不得意だと言う。その息子たちや配偶者、子どもたちの中にはスペイン系の血を引く者もいた。ああ、ブラジル人になるということはこういふことかと納得した覚えがある。当時は日本人移住地を訪ねても、すでに二世で日本語を話す人とはめつたに会えなかった。

ところがアリアンサを訪ねてみると、ユバ農場では二世も三世もごく日常的に日本語を使っていた。ユバは特殊な農場だとは聞いていたが、それにしてもなぜここだけ日本語環境が残っているのか。サンパウロ市で話を聞く限り、ユバのような特殊な農場があるのは弓場勇というカリスマ的リーダーがいたからで、弓場勇は二年前に亡くなったから、遠からず農場は消滅す

るであろうというのが一致した意見だった。

◆消えゆく日本文化

十七年後、わたしはふたたびアリアンサを訪ねることになった。かつて訪ねた日本人移住地はブラジル人の街に変わりつつあったが、アリアンサは相変わらず日本のな村として存在しており、村の文化センター的役割を担うユバ農場には、日本では姿を消してしまっただ懐かしい日本が生きていた。あらためて日本文化を残す力とは何だろうと考えはじめた。

日本移民はもともと農業移民として移住したため、戦前は九〇%が農業者だったが、一九八八年の日系人調査では一〇%少々に減っていたという。その代わり、日系は断然高学歴高所得者が多い。その反面、日本語を中心とする日本文化は姿を消して行くことになる。

戦前移住者の話を聞いて歩くと、もともと永住を目的にブラジルへ来たわけではなく、永住するしかないと考えようになったのは日本が戦争に負けてからだという人が多い。そうなると、子どもたちはブラジル人として高等教育を受けさせ、豊かで安定した生活をさせようということになる。子どもたちが街でホワイト・カラーとして生活するようになると、親は農業の跡取りがないので、農場を売ってサンパウロ市へ移り、移住地というコミュニティは衰退して行く。よくドイツ系と比較されるが、日本人はコミュニティへの執着が薄いと言われる。

生活文化というものはコミュニティに属してこそ継承されるものであり、コミュニティを離れた生活を送れば都会文化の中に埋没していくのは当然である。

◆多文化共生と日本文化の課題

世界各地からの移民で構成されるブラジルは多民族多文化社会である。それはある意味で世界の縮図であ

る。一九七〇年代からインテグレーションと呼ばれる多文化統合の動きがはじまっていたが、わたしが移住体験の聞き取りに歩くようになった一九九四年以後は社会学者フェルナンド・エンリケ・カルドゾが大統領に就任したこともあり、ブラジルを紹介するとき、「多文化共生」という言葉がよく使われるようになっていた。

多文化共生とは多数派少数派にかかわらず、ポルトガル系もドイツ系もインディオも、それぞれの民族文化を継承し、相互に影響し合いながらブラジル文化として統合して行こうということである。冷戦終結以後、混迷を深めつつある世界に対して、ブラジルが多文化共生を掲げることが、強い者に統合される時代を乗り越え、新しい共生の時代を切り開くのだという意志の表明を感じさせる。

そこで日系が継承すべき日本文化とは何かという問いが浮かび上がってくる。

わたしたち日本人は、日常、日本文化とは何かなどという意識をほとんど持たない。あらためて自分の周囲を見渡すと文化状況は液状化し、何をもちて日本文化とするかは判断しがたい。戦後はひたすら古くさい日本文化をふり捨てて近代化を急ぎ、今では経済のグローバルイズムに翻弄されながら揺れ動いている。実はブラジルに残る日本文化が問われているのはではなく、母国の日本文化とは何かが問われていたのである。

◆日本文化をどう見るか

二〇〇八年にアリアンサのコムニダーデ・ユバ(ユバ協同農場)が第一四回マツシャード・デ・アシス記念文化功労賞を受賞して話題になった。これは連邦政府の多民族文化アイデンティティ局の推薦によるものである。

わたしの知るかぎり、日系社会ではアリアンサ・ユバはきわめて理解しがたい存在であった。農民バレエ団として知られる珍しい集団だが、生産活動とは無縁なバレエや演劇に夢中で、いまだに日本語にこだわった姿が理解できなかったのだろう。

では、なぜブラジル社会はユバを評価するのか。そこには日本人が考える日本文化と、多文化社会が求める日本文化との間に大きなギャップがあることを示している。

弓場勇をリーダーとするユバ農場は、人間が組織に依存する農業を否定し、人間同士が助け合う農業を目指した。この点が前近代的と見なされた理由であったが、アリアンサはもとも移住者の自治を基礎として開設された移住地であったから当然の選択であった。

ユバ農場は①自然への祈り、②土から離れぬこと、③芸能による心の一体化、この三点さえ守れば、どのように働き、どのように生活するかは個人の自由としている。それが日本人の協同を生かす道だと考えたからである。



ブラジル連邦政府第一回四回マツシャード・デ・アシンス記念文化功労賞をコムンダー・デ・ユバが授賞。 リオ・デ・ジヤネイロ市立劇場「撮影・神沢ルツシ」

近代の日本社会が失った芸能についても、バレエや演劇を趣味としてではなく、人間を豊かにし、コミュニケーションの協同を持続させる大切な芸能として尊重した。この日本文化の特性を生かした芸術性がブラジル社会との接点となり、共感を広げていった。

協同のかなめはコトバである。コトバはユバ方言とも言うべき、共同生活の中で培われた生活語を重視した。子どもたちの人格育成も生活語によって培う道をとった。

多文化共生という視点から見ると、ヨーロッパ系の合理主義的な協同とはちがって、ユバの協同はそれぞれが自由に働き、誰に対しても心を開く自然体である。ブラジル社会はこの西欧的合理主義とは異質な、それでいて魅力的な農民の芸術性を、多文化共生の一角にある日本独特の文化と見たよつである。

◆日本文化の弱点を乗り越えて

日本文化は顔の見える範囲の小集団文化として積み重ねられてきた。そのため、無言のうちにお互いの胸の内を察するデリケートなコミュニケーションが可能で、知り合った者同士はごく自然に助け合う習性を持っていた。しかしその反面、よそ者に対しては心を閉ざしがちで、広い社会に対しても指導者まかせで、自分で考えることは不得手であった。

ところが個人を基礎とした西欧系の社会に単独で移住すると、風俗習慣も違い、個人としては対応できず、小集団に閉じこもりがちになり、アメリカでもブラジルでも同化しにくい民族と見られてきた。多文化社会ではこうした文化的弱点をどう克服するかが課題となる。だが、日本政府の移住政策は日本人特有の文化的特性には無頓着で、ただ移民を送り込むだけで、その後の成り行きは移民たちの自己責任とされた。帰国で

きない移民たちは厳しい生活を送らざるを得なかった。二〇世紀初頭、アメリカで排日差別を受けた体験者永田稠（しげし）や輪湖俊午郎らは、移民の生活を改善するため、ブラジル社会との共生を旗印に掲げ、サンパウロ州の奥地に協同組合方式のアリアンサ（和親・協同）移住地を建設した。その建設の主力は大正デモクラシーの影響下で育った日本力行会海外学校出身の力行青年たちであった。

アリアンサの建設はアリアンサ運動と呼ばれ、ブラジルに協同の夢を求める運動であった。永田は青年たちに「世界市民たれ！」と呼びかけ、経済的苦境に直面したときは「コーヒーより人を作れ！」と激励した。アリアンサは移民社会では少数派であり、一九二七年から一九三四年にかけては日本政府の干渉によって苦難の道を歩むことになるが、力行青年たちは弓場協同農場を結成してアリアンサを守る先頭に立った。弓場勇はそのリーダーであった。そこから「アリアンサあつてこそその弓場農場」とするユバイズムが蓄積され、継承されて行くことになる。その根底には顔の見えるコミュニケーションを文化の基盤とする、伝統的な日本文化が息づいていた。

二十一世紀が多文化共生の時代であるとしたら、わたしたちは自ら捨て去った「顔の見える文化」をもう一度見直し、異文化と共生する新しい道筋を探る必要があるように思う。日系同胞はわたしたちにとっては異文化接触の先駆者であり、その試行錯誤の歴史は母国日本に新しい道筋を示すだろう。

ブラジル特報編集部注・筆者には本テーマに関連した『共生の大地アリアンサ―ブラジルに協同の夢を求めた日本人』同時代社 二〇一三年八月および『異文化の中の日本 国際時代の先駆者 ブラジルの日本人』同時代社 一九九六年七月等の著作がある。

お知らせ

NPO 現代座公演

約束の水 合唱のある二幕四場

2014年2月

13日(木) 19:00
 14日(金) 14:00 / 19:00
 15日(土) 14:00
 16日(日) 14:00
 17日(月) 14:00

参加費 大人 3000円
 小中高 1000円

各回80名の予約制です。事前にお申し込み下さい。

NPO 現代座事務所 TEL:042-381-5165
 TAX:042-381-6987

NPO 現代座:木下 TEL:090-2402-6617
 Mail:michiko@gendaiza.org

公演のDVD・さし上げます

会員の皆様には、現代座公演の舞台のDVDをさし上げております。

- ・2月公演 「約束の水」
- ・2013年公演「出会いの街」
- ・2012年公演「ユーモレスク・よみがえる夢」
- ・2011年公演「ユーモレスク・よみがえる夢」
- ・2011年現代座3F「蒼い空・友の呼ぶ声」
- ・2008年公演「もくれんのうた」
- ・2008年「約束の水」赤平市民会館閉館公演
- ・1981年「出航」

これ以外にもご希望の作品をDVDにしますのでお申し込みください。
 (会員以外の方には1000円のご寄付をお願いします)

NPO現代座会員の取り組み

ジャグリング&音楽集団「ながめくらしつ」

新作公演「おいていったもの」

演出・振付 目黒陽介
 音楽 坂本弘道

4月11日(金) 19:30開演
 4月12日(土) 14:00開演 / 18:00開演

現代座ホール

前売:3000円(学生2500円)
 当日:3500円(学生・一般)

ながめくらしつサイト予約フォーム

<http://nagamekurasitsu.com/>

共生の大地・アリアンサ

ブラジルに協同の夢を求めた日本人

木村快著 同時代社刊



定価は3675円(税込み)で、書店でもネット通販でも購入できます。現代座では特別価格3000円(税込み)で販売しています。3000円と送料300円を振り込んでいただければ郵送します。

お問合せ:現代座 042-381-5165
 木下 michiko@gendaiza.org

振込先:郵便振替口座 00110-7-703151 NPO 現代座

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費(現代座レポート購読料を含む)

一般会員 3,000円
 協賛会員 10,000円(1口以上)
 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO 現代座